

県立高等学校教育の在り方検討委員会ブロック別懇談会（盛岡ブロック） 懇談の記録（要旨）

平成26年8月27日（水）

岩手産業文化センター第10会議室

佐藤 光彦 盛岡市副市長

進学する高校生が多いことは承知している。

就職した高校生の3年以内の離職率が5割近くあり、社会の安定と地域の発展を考えると問題である。希望と現実の違いが離職の原因となっているのであれば、次の就職先を考えることができる。しかし、何をやっていいか分からないがとりあえず就職したというミスマッチは、次の就職先を考えることが難しい。人生の第一ステージとも言える時に、挫折をあじわうことは将来の不安要素となる。

盛岡市立高校では、9年連続100%の就職実績があり、離職率も5割という数字にはなっていない。キャリア教育を重視し、進学だけでなく、就職のケア等も配慮して欲しい。

田村 正彦 八幡平市長

高校の現状と課題について、「高校進学の手が奪われた状況になっていない」と記載されている。しかし、そのために保護者の経済的負担等が大きくなり厳しい状況にあるのが現状である。これから再編が進むことで、家庭の経済的負担が心配である。

地域で、地元の高校の就職活動を助けようとする動きがある。学校の努力も大きく、地域と企業と学校が連携しているということも考慮して欲しい。

佐野峯 茂 滝沢市副市長

人を育てる教育をぜひともして欲しい。一人の人間として、大事に育てる視点を持って欲しい。

学校の立地が中心部から遠い状況があり、バス代等保護者の交通費の負担が大きい。再編にあたって、遠くから通学することも考えると便利な場所に学校を建てる等、施設の環境を整えて欲しい。

深谷 政光 雫石町長

雫石町にとり、まちづくり指針として教育は最優先である。雫石町は盛岡市に隣接していることから、進学する際の選択の機会は広い。これから、少子化、人口減少が進む中、国づくりの視点も変わってくるのではないかと。

雫石高校は、これまで地元で定着する人材を輩出し、地域を愛し地元に住もうという意識を育てている。県外からの入学者もいる。これからのまちづくりに大切な学校である。今後の地域や岩手の在り方を真剣に考えていきたい。

鈴木 重男 葛巻町長

8月の岩手日報の新聞記事で、「小規模校の存続について、従来の基準にこだわらず総合的に判断する」という考えが示されたが、これを歓迎する。

それぞれの地域の発展が、県の発展につながる。葛巻町では、7割が地元の高校に進む。地理的な条件、通学時間、現在の高校の教育活動等も考慮して検討して欲しい。

第三セクターを中心に、これまで10年以上、都市住民との交流に取り組み、山村の持つ豊かさへの理解を得ている。今後、山村留学の招聘等も考えたいと思っている。そのために、自治体としても、受入体制を整えていきたい。また、そのための支援をお願いしたい。町の特性と連携した魅力ある高校になるような検討をお願いしたい。

民部田 幾夫 岩手町長

平成 22 年度から、高校の在り方が検討されてきた。その想いを共有し、次の方向に進んでほしい。「自治体の最高教育機関は中学校」となるべくならないように、「自治体の最高教育機関は高等学校である」と言えるような在り方であって欲しい。

熊谷 泉 紫波町長

人口減少に応じ、再編は検討しなければならないと考えている。理想は 1 学級 40 人であるが、地域的なことも考え検討していかなければならないのではないかと。

紫波総合高校の学科は、今の時代やニーズに合っているか見直すべきと考えている。また、同じような普通高校については、ある程度整理が必要ではないかと。

川村 光朗 矢巾町長

町政の第一に教育を掲げている。地域の発展、活性化に高校は不可欠な存在である。

不来方高校は、地域との連携を大事にし、「町立不来方高校」という意識を住民も持っている。

藤原 一夫 盛岡市農業委員会会長

農業は岩手の基幹産業であり、農業の大切さを、もっと学校教育で子どもたちに理解させる教育をお願いしたい。

武田 初太郎 新岩手農業協同組合常務理事

生徒の数が減少している現状にあるが、高校進学率 98.5%という現状を考えると、町村 1 校の県立高校はできるだけ存続させて欲しい。

袖林 広見 新岩手農業協同組合雫石支所長

地元の中学生は高校を選択できるチャンスがあるが、沿岸地域や周辺地域の中学生は、必ずしも行きたい高校に行けるとは限らない。

経済的理由や家庭の状況で、学力があっても盛岡の学校に行けないということがある。1 学級の定員を減らす等して地域の小規模校はしっかり残し、県の隅々まで高校がある状況をつくり、子どもたちが学べる環境を整えて欲しい。

辰柳 敬一 葛巻町農林水産関係者代表

広い県土である岩手の発展にとって、県立高校は大事である。岩手の発展に資する県立高校の在り方を考えて欲しい。

盛岡等の規模の大きな学校に馴染めない子もいる。葛巻高校のような小規模校であっても他の地域から希望して入学するような高校の在り方を考えて欲しい。

作山 道幸 岩手中央農業協同組合紫波地域営農センター所長

農業情勢は厳しい状況にあるが、食の安全、ものづくりの大切さを高校教育で教えてほしい。農業は、面白い部分もあるがそれだけで生活していくことはできない。農業の大切さを授業の中で教えていって欲しい。

高橋 義幸 矢巾町農業委員会会長

見直しの論点について現状と課題が示されているが、1 点だけ意見を述べさせていただく。高校進学を目指す生徒の希望が叶うような、入学者選抜の在り方を検討して欲しい。

遠藤 収一 八幡平市商工会事務局長

地元の高校は、地域の発展に必要なものである。商工会でも、高校生の就職の地元志向に応え、企業と学校との懇談会、インターンシップへの協力等の支援をし、地元への就職率が高くなっている。地元企業に若い人材を雇用できることは地元企業の発展にも結びつく。若い人材を残していきたい。地元で若い人材を雇用することで、地域の伝統行事に若い力を活用できる。

少子化の進行は厳しいが、学校の統廃合が進むと地域の学校と産業界との連携がなくなり、地域が疲弊して人口減少が加速し、負のスパイラルに陥る。適正規模等といった効率重視ではなく、バランスを大事にして再編を考えて欲しい。

阿部 正喜 滝沢市商工会会長

滝沢市にある盛岡北高校、盛岡農業高校の両校は、地域に溶け込み、地域には不可欠な存在となっている。

これまで、滝沢市の人口は増加していたが、最近の10年間は人口増加の伸びも止まった。教育界、産業界の産学一体となった連携が少子化の歯止めにつながるのではないかな。

今後、6・3・3制や中高一貫教育の考えも検討が必要ではないかな。

岩崎 憲悦 雫石商工会事務局長

学校がまちづくりに大事な存在であることは、間違いない。

代々木ゼミナールの統合がニュースになった。盛岡市の学校を雫石町に移す等、県立高校も大胆に改革すべきではないかな。

桂川 龍太郎 葛巻町商工業関係者代表

地元の学校が無くなるのは、教育における地域格差の拡大につながる。数字の論理だけで話を進めないで欲しい。子どもたちは、地域との関わりの中でよりよい教育を受けている。国公立大学への進学者も出している。小さな町では学校は無くなっても良いというようにも聞こえ、納得できない面がある。葛巻高校の存続を願っている。

八戸 保彦 岩手町商工会会長

若い人材を育成する場として、地域の高校がある。多様化した業種に対応できる人材づくりを行って欲しいし、地域と高校との連携も図っていきたい。

橋 冨雄 紫波町商工会会長

建設業の立場から、土木・建築科が県内の工業高校に少ないため、専門知識を持った高校生が育っていない。学校には、子どもたちの専門性を高めること、プロ意識を持たせること、建築家を育てることをお願いしたい。就職してもすぐ辞めてしまう状況や、災害復興等に対応する技術者が人手不足という状況を改善したい。地域の発展に、技術者の存在は不可欠である。

建設業協会として高校との協議の場を持ちながら、高校に協力していきたい。

西郷 晴安 矢巾町商工会副会長

学校の存在は地域経済への影響が大きい。子どもたちが、少子化、人口減少問題について考えるような教育をお願いしたい。

盛岡南高校や不来方高校体育科卒業生は、体育教員としてどれくらい採用されているのか教えて欲しい。

熊谷 雄一 盛岡市PTA連合会理事

人生は、P D C Aの繰り返しである。その根源となる、考える力、行動する力を学校で育てて欲しい。子どもたちには、ライバルの存在等、切磋琢磨する環境も必要である。何が子どもたちにとって大事なことなのかを忘れずに、適正な規模を考えて欲しい。

工藤 正人 八幡平市PTA連絡協議会副会長

地元の高校は、生徒数等にかかわらず残して欲しい。そのことが、企業や地域の発展につながる。

葛巻 厚志 滝沢第二中学校PTA会長

自分の子どもが県外の大学に入学した。将来的に岩手に戻ってくる可能性は低いと思う。県内では就職するのが難しい状況にある。将来、地元に残って働くことを考えると、高校だけではなく、大学も含めた人材の育成が必要ではないか。

岩手県の大学入試センター試験の成績が非常に低い。人材育成のためには、学力についても課題になるのではないか。

足立 頼子 雫石中学校PTA会長

子どもが九州での次世代リーダー塾に参加し、全国のいろいろな高校生と話し合い、たくさんのごことを学んできた。

地元のリーダーを育てていくという視点から、岩手でも高校を超えてディスカッションする場が、もっとあればよいのではないか。高校生一人ひとりが元気になることで、中学生が高校に憧れを抱けるようになるのではないか。

本宮 毅 葛巻町PTA連合会監事

葛巻町では中高の連携に取り組んでおり、中学校のPTA講演会で葛巻高校の校長先生が高校の現状等をお話しする等、高校との連携を図っている。葛巻町では、距離的に町外の高校には通えない。今後も元気を発信する地域の学校として大事にしたい。

佐々木 啓三 岩手町PTA連合会会長

沼宮内高校のホッケー部が全国優勝し、中学生の子どもたちの励みになっている。これからも「ホッケーの町・岩手町」として、支援していただきたいと考えている。

富岡 靖博 紫波第一中学校PTA会長

紫波町内の生徒は、盛岡市や花巻市の高校にも進学し通学しているが、交通費の負担が大きくなっている。地元、紫波総合高校に特別進学コースを設ける等、魅力ある取り組みをして欲しい。

紫波総合高校は、地域の夏祭りにも参加し、地元で根ざした活動をしている。各市町村に拠点となる総合的な学校を整備してはどうか。また、高校までのバスの整備や寄宿舎の設置等、通いやすい環境も考えてはどうか。

盛岡工業高校の電子情報科、土木科等は北上市周辺の工業集積や復興需要等で志願者が多くなっている。今のニーズにあった学科、定員を設定する等、素早く取り組んで欲しい。

宮野 和美 矢巾北中学校PTA会長

小規模校のみの統廃合ではなく、例えば、盛岡一高から三高までを統合し、進学をめざす学校をつくることもあってよいのではないか。

沿岸の状況等を見た場合、子どもたちの選択肢が狭まるようなことはあってはならない。沿岸の小規模校を廃止することは、地元に残って頑張りたいという子どもの気持ちをくじいてしまう。

私立高校は、学校の特色をPRし中学生にその魅力を伝えている。公立高校も特色づくりが必要ではないか。また、キャリア教育等を含め、地域に根ざし、きめ細かな教育ができる高校をめざして欲しい。

千葉 仁一 盛岡市教育委員会教育長

自立した社会人としての資質を有する人材育成等、岩手の高校教育がめざすものを検討の根本に据えたい。

小中学校と高校の連携を進めていただきたい。高校教育は、義務教育の基礎の上に成り立つ。教員同士、子ども、保護者等、様々な連携をしていかなければならない。社会に役立つ人間を育てるという視点は同じである。

専門高校における職業教育にさらに力を入れて欲しい。キャリア教育を通して、職業観、勤労観を育てる教育を行っているが、どの仕事も大切であることを理解させ、仕事へのやりがいを持たせる必要がある。農業科についても、食料自給率や食の安全等の観点も含め、今後どうあるべきか論点として検討して欲しい。

遠藤 健悦 八幡平市教育委員会教育長

八幡平市から、公立、私立併せて62%の生徒が盛岡の高校に通学しているが、地元の高校にしか通えない子もおり、このような子どもたちに対応する高校の在り方を検討していただきたい。

インクルーシブ教育の推進、特別な支援を必要とする子どもたちへの対応も考えていただきたい。特別支援学校の新設の基準はあるのか知りたい。

熊谷 雅英 滝沢市教育委員会教育長

滝沢市に立地する2つの高校は、地元で溶け込んでいる。

平成20年度に実施した中学生のアンケートが、高校の学科設定・定員に反映されていると感じる。震災後の動向を踏まえ、改めて中3の1学期に調査をお願いしたい。

吉川 健次 雫石町教育委員会教育長

雫石高校は、わかる授業づくりや個に応じた指導を行い、進学希望、就職希望の実現は100%である。各市町村に県立高校が1校あることが望ましい。

地域の住民も雫石高校の部活動指導者として活躍している。地域の特長をいかし、地の利をいかした学校経営ができるのではないかと。町内には「雫高を支援する会」があり、地域に根ざした高校である。

中田 直雅 葛巻町教育委員会教育長

地元の高校に通いながら子どもたちの夢や希望を実現することが教育の役割であり、教育の機会均等を保証する環境を整えることが大事である。

葛巻町では、平成14年度から中高一貫教育を掲げ、町でも800万円の予算措置を行っている。どの自治体にも高校がある状況が、継続されることを望んでいる。

現在、葛巻高校の25人が学区外生徒となっている。学校の地理的実態にあわせた学区という柔軟な対応をして欲しい。

平澤 勝郎 岩手町教育委員会教育長

沼宮内高校ホッケー部の活躍は、小規模校でも見事な教育ができることの証しである。高校の在り方を検討する上では、地域の実情を最大限に生かすことが大事である。

今後、あらゆる機会をとらえ標準法の改正等、1学級の定員の見直しを国に強く働きかけたらどう

か。岩手県だけではなく全国の問題である。

侘美 淳 紫波町教育委員会教育長

紫波総合高校の充実発展がキーワードである。総合学科高校について、プロジェクトチームを設置し、今後どうあるべきかしっかりと検討して欲しい。紫波総合高校は地域に貢献する活動をしている。他の地域から入学してくる生徒も多い。

総合学科高校に工業系を設置してはどうかという話もあり、生徒のニーズに応じたソフト面の開発を柔軟に考えてはどうか。

越 秀敏 矢巾町教育委員会教育長

学区については、大きく括って再編するのか、究極的に全県1学区になるのかを考えなければならない。

学級数調整について、ブロック内での調整は必要だろうが、減らすだけでなく、人気のある学校は、「増やす」という考え方もあるのではないか。

木村 久 学校教育室高校改革課長

盛岡南高校、不来方高校体育科卒業生の教員採用については、資料を持ち合わせていないため、後日、回答させていただきたい。

岩手町教育長から出された学級定員の見直しについては、義務教育で導入された上で高校での定員見直しということになると思うが、義務教育も含め要望を考えていきたい。

アンケートについて、その実施については中学生だけでいいのか、高校生を対象とした方がいいのか、実施方法も含め検討したい。

民部田 誠 学校教育室首席指導主事兼特別支援教育課長

特別支援学校の設置基準については、国の定めはない。国もインクルーシブ教育の推進に向け制度改革を行っており、この動向を見て岩手県における対応を検討していきたい。

佐野峯 茂 滝沢市副市長

人を育てる上で課題を解決する力は大切であるが、岩手県にとっては、「郷土を愛する心」「人を思いやる心」を第一にして欲しい。

知識社会で活躍するためには安定した生活、人と人との絆がベースとなり必要であるという研究結果がある。それは故郷の祭りや郷土芸能を通して培われる。故郷を切り捨てることがあってはならない。その観点をもって見直しを進めて欲しい。

熊谷 雄一 盛岡市PTA連合会理事

小中高生対象に、税や社会、世の中を考えてもらうために租税教室を実施しているが、地域の人材がもっと学校に積極的に入れるような窓口があればよい。

工藤 正人 八幡平市PTA連絡協議会副会長

岩手の文化等を教えていく機会があればいいと思う。

足立 頼子 雫石中学校PTA会長

会議に出席して初めて県立高校の在り方が検討されていることを知った。県民全体で考えてもらえるように、県民に情報等をもっと発信して欲しい。

熊谷 雄一 盛岡市PTA連合会理事

中学校の部活動が課題ではないか。指導者の不在ということも課題である。将来的にスポーツが成立しない心配がある。もっと地域の方の力を活用したらどうか。学校に地域が積極的に関わると夢のある学校ができるのではないか。

藤原 一夫 盛岡市農業委員会会長

農業の高齢化が進み、後継者が不足している。もっと学校で農業後継者の育成についての教育があつてよいのではないか。

袖林 広見 新岩手農業協同組合雫石支所長

地元で根ざした教育を行うことで、地元子どもたちが残れば理想的である。教育の場で夢を持たせ、その夢を実現させるための教育が必要である。地元ではどのような職に就くことができるのか等を子どもたちに教えて欲しい。教育学部を卒業しても教員になれず、JAに就職し、ギャップに悩む若者もいる。

辰柳 敬一 葛巻町農林水産関係者代表

その町の産業を、地域や高校が一緒になって学べる高校があつてもよいのではないか。

川村 光朗 矢巾町長

専門高校は、地域の実情に合った学科を整備し、下宿や交通費等の支援もあわせて考えていくことが必要ではないか。例えば、葛巻高校は酪農科やクリーンエネルギー科のように、地域の特色ある産業につながるような考えもあるのではないか。

平賀 信二 教育次長兼学校教育室長

あまりに限定的な学科にはできないと思う。進学を希望する生徒のためにも、普通科は残さなければならないと考える。選択肢の確保がキーワードである。学校の特色を生かしながら、子どもたちの選択を狭めない内容で考えていきたい。

熊谷 泉 紫波町長

このメンバーで何回集まっても同じ意見しか出てこない。自分の町に高校が不要という首長はいない。どこかで減らすことは必要であると思う。県教委はこれまでの意見をしっかりまとめて欲しい。

民部田 幾夫 岩手町長

70名以上も出席する場で人から意見を聞くというのは、懇談会の方法として違うのではないか。会議の在り方を明確にする必要がある。

行政の継続性の視点に立った時、平成22年度に検討した内容が生きていると信じている。基本的方向はこれでよしとしたい。次の具体的再編については意見を言っていきたいし、熟議できるように時間をとって欲しい。

鈴木 重男 葛巻町長

郷土を愛し、岩手を理解する教育が大事である。岩手の持つ地の力を生かすのはもちろんだが、今後、食糧の問題が大きくなる。もっとこの問題について力を入れ、人材の育成を図っていきたい。

深谷 政光 雫石町長

雫石町から参加した5人の想いは一つである。いろいろな立場の人が集まりこのような機会を持つ

ことは重要であり、勉強になった。地域があつてこそ小中高校がある。雫石町の認識は、小中高一貫した教育を歴史的に大事にしてきた。県教委は、国づくりと同じ視点で今後も考えて欲しい。

佐野 峯 茂 滝沢市副市長

人材の定着がキーワードとなる。地域と連携することは、子どもたちが地域を知ることになる。地域と学校の連携を大事にし、故郷はよいという思いを抱かせる教育をしていただきたい。

田村 正彦 八幡平市長

平成 22 年度に作られた計画では、「再編必要」ということであつたが、これに固執、踏襲して検討していくのか、それとも、柔軟に、大胆に行おうとしているのか聞きたい。

中学校のクラブ活動は大変な状況である。教える教員が不足している実態がある。クラブが無くて活動できないという状況を解消する方法を考えて欲しい。

佐藤 光彦 盛岡市副市長

盛岡市においても、大規模校であろうと小規模校であろうと、抱えている問題は同じである。高校生は、いろいろなスイッチを持っている。このスイッチを入れてあげるのが教育である。交流活動等、ボランティアの活動も積極的にやらせたい。

平賀 信二 教育次長兼学校教育室長

前回の検討会の頃と状況や法律が変わった。必ずしも、4～6 学級に固執していない。全校が 120 名という状況でも、「残る」という判断はある。これから方向性を検討していくということである。

内館 茂 県立高等学校教育の在り方検討委員会委員

盛岡で生まれ、盛岡で育ち、今も盛岡で生活している。改めて「盛岡は選択のチャンスがいっぱいあつた」と思うが、県内の様々な意見を聞き、「中学生全員が、均しく高校教育を受けることは当たり前のことであるが大切なことである。」と感じた。

現状を維持することはできなくても、「出来る限り」「ぎりぎり」まで維持していかなければならないと思う。具体的なことについては、皆さんの意見も聞いてこれから考えていきたい。

佐々木 修一 県立高等学校教育の在り方検討委員会副委員長

建設的な意見が多く、またユーモアもあり、内容のある懇談会だった。教育委員会に在籍していた頃に長く携わつたが、震災後に感じたことは、県立高校を支援する活動が具体化されたことである。高校が地域から支えられていることを改めて感じた。今後の視点として、次の 3 点が大事であると感じた。

- ①統合等のハード面よりも、地域を愛し、地域を担う人材を育てることを大事にする。
- ②小規模校のよさや専門校の時代への適合をしっかりと見てはつきりと示すべきである。
- ③統合というハード面の基準だけでなく、各高校の特色づくりを十分に研究検討して提言するようにとのことだったと思う。

いただいた意見を咀嚼したうえで、基本的方向の見直しに当たりたい。